

令和6年度  
厚生労働科学行政推進調査事業費（障害者政策総合研究事業）  
分担研究報告書

国連の国際障害統計ワシントン・グループの指標と  
既存質問「健康上の問題での日常生活への影響の有無」の比較：  
2022年国民生活基礎調査の二次データの分析

研究分担者 齋藤 崇志（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）  
研究代表者 今橋久美子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

研究要旨

国連の国際障害統計ワシントン・グループの指標（Washington Group Short Set on Functioning; WG-SS）が、2022年の国民生活基礎調査に導入された。本研究の目的は、同調査で使用されてきた障害を機能的に把握する項目ではないが、主観を中心としてみた場合に関連する既存質問「健康上の問題での日常生活への影響の有無」と新たに導入されたWG-SSで定義される「苦労の有無」の判定の差異を記述することである。具体的には、国民生活基礎調査の二次データの中から6歳以上の回答者のデータ（n=32,212）を用いて、WG-SSと既存質問で定義される該当の有無に関する判定の差異を記述した。次に、両質問で定義される「あり」の該当者数を算出した。その結果、全対象者の87.61%（n=28,221）において両質問による有無の判定が一致し、12.39%（n=3,991）で一致しなかった。WG-SSで「苦労あり」と判定された者は3,453名（10.7%）、既存質問で「影響あり」と判断された者は4,218名（13.1%）であった。WG-SSにおいて「苦労あり」と回答する人の割合は、既存の質問で「影響あり」と回答する人の割合よりも少ない傾向がある。このことから、これらの指標を用いて生活状況を比較する際には、各指標の特徴や差異に留意する必要がある。また、WG-SSを障害者施策の立案に活用するには、カットオフ値の調整等について引き続き次年度においても調査研究、検討を行うことが適当である。

A. 研究目的

国連の国際障害統計ワシントン・グループの指標（WG指標）は、世界共通の方法で障害を定義し、国際的な障害統計を作成することを目的に開発された指標である。WG指標を通して得られたデータは、障害者人口（Prevalence）と障害の有無による格差（Exclusion）を世界規模で把握し、国家間・

地域間の差異を定量化するための国際障害統計の作成に用いられる[1]。

WG指標は単一の指標ではなく、対象とする年齢や障害像に特異的な複数の指標（モジュール）で構成されている。これらのモジュールの中で、Washington Group Short Set on Functioning（WG-SS）は、最も基本的なモジュールに位置づけられている[1]。WG-

SSは、機能（見る・聞く・歩く・記憶する・日常生活活動・意思疎通）に関する困難性を聴取する6つの質問で構成され、子供から大人まで幅広い年代に適応される。このWG-SSは各国の国勢調査や全国規模の社会調査に組み込まれており、80か国以上の国々で用いられている。また、国連などの多くの国際機関が、障害に関する各国の取り組みをモニタリングするための指標としてWG-SSを採用している[1]。障害に関する国際標準の指標として、WG-SSの活用がひろがっている[2]。

2022年に実施された国民生活基礎調査において、WG-SSが日本の全国規模の社会調査で初めて用いられた[3]。国民生活基礎調査では、障害を機能的に把握する項目ではないが、主観を中心としてみた場合に関連する質問の1つとして、「あなたは現在、健康上の問題で日常生活に何か影響がありますか？（回答選択肢：ある/ない）」が用いられている。すなわち、2022年の国民生活基礎調査では、WG-SSと既存質問の両方が障害に関連する質問として用いられることになった。

WG-SSと既存質問は、障害に関連する事項を問う点で共通している。ただ、質問内容に差異があるため、両質問は異なる集団を定義・捕捉すると推定される。その結果、両質問に基づいて得られる該当者数も異なるものになると推定される。新たに導入されたWG-SSと既存質問について、両者から算出される数字の差異に関する理解を深めることは、WG-SSに基づくデータの利活用と、既存質問に基づくデータとの相互利用を適切に行うために不可欠である。

本研究の目的は、WG-SSと既存質問の特徴

の差異を明らかにすることである。

## B. 研究方法

本研究の方法と結果の詳細は、オンライン上で無料公開されている学術誌[4]で公開されている。そのため、本稿では、方法と結果の概要のみを記す。

本研究では、厚生労働省から提供された国民生活基礎調査(2022年)の二次データを横断的に分析した。提供を受けた二次データ(n=45,160)の中から、取り込み基準(6歳以上の者)に合致し、除外基準(分析に用いた変数に欠損値がある者)に該当しない32,212名分のデータを分析に用いた。

分析に用いた変数は、基本属性(性別・年齢・婚姻状況・居住地)、WG-SS、既存質問であった。

WG-SSの具体的な6つの質問文は下記の通りである。回答者は、6つの質問に共通する回答選択肢(苦労はありません・多少苦労します・とても苦労します・全くできません)から1つを選び回答した。WG-SSの回答に基づいて障害の有無を判断する基準として、WG指標の開発者らの推奨する基準を用いた[1]。すなわち、6つの質問のうち、1つでも「とても苦労します」または「全くできません」と回答した者を、「苦労あり」と判定した。

・眼鏡をしても、見えにくいといった苦労はありますか。

・補聴器を使用しても、聞き取りにくいといった苦労はありますか。

・歩いたり階段を上るのが難しいといった苦労はありますか。

・思い出したり集中したりするのが難しいといった苦労はありますか。

・身体を洗ったり衣服を着るような身の回りのことをするのが難しいといった苦労はありますか。

・通常の言語を使ってのコミュニケーション（たとえば、人の話を理解したり、人に話を理解させることなど）が難しいといった苦労はありますか。

既存質問の質問文は、先述の通り、「あなたは現在、健康上の問題で日常生活に何か影響がありますか？」である。「ある」と回答した者を、「影響あり」と判定した。

全ての統計解析は IBM SPSS statistics (28.0.1.0) を用いて実施された。まず、WG-SS と既存質問で定義される障害関連項目の有無に関する判定の差異を記述した。次に、両質問で定義される障害関連項目「あり」の該当者数を、全対象者、ならびに、基本属性毎に算出した。また、両質問に基づく該当者数の比 (WG-SS/既存質問) を算出した。

(倫理面への配慮)

本研究は、国立障害者リハビリテーションセンター倫理審査委員会の承認を得た後に実施された (承認番号: 2024-069)。

### C. 研究結果

分析対象となった 32,212 名 (男性; 15,368 (47.7%), 女性; 16,844 (52.3%)) の平均年齢 51.00±22.48 歳であった。

表 1 に WG-SS と既存質問で定義される障害関連項目の有無に関する判定の差異を記した。全対象者の 87.61% (n=28,221) は、両質問の判定が一致していた。一方、両質問の判定が一致していなかった者 (n=3,991 (12.39%)) の内訳は、WG-SS が「苦労あり」で既存質問が「影響なし」であった者が

1,613 名 (5.01%)、反対のパターンが 2,378 名 (7.38%) であった。

表 2 に、全対象者、ならびに、基本属性毎の両質問で定義される障害関連項目「あり」の該当者数を記した。全対象者において、WG-SS で「苦労あり」と判定された者は 3,453 名 (10.7%)、既存質問で「影響あり」と判定された者は 4,218 名 (13.1%) であった。両質問に基づく障害関連項目「あり」の該当者数の比 (WG-SS/既存質問) は、0.82 であった。基本属性毎の同比は、性別、婚姻状況・居住地は概ね 0.80~0.90 を示していた。一方、年齢層別の同比は、0.63~1.23 を示し、中高年者で同比が低下し、子供で同比が高値を示していた。

### D. 考察

WG-SS と既存質問の判定が矛盾する結果となった者が約 12% 存在していた。この差異は、WG-SS が 6 種類の機能に焦点を絞った質問で構成されているのに対して、既存質問が特定の機能や状態に焦点をあてた質問となっておらず、広範な機能障害や生活の困難性を捕捉する可能性がある質問となっており、この質問焦点の差異に起因して生じたと考えられた。

また、WG-SS で「苦労あり」と判定される者の数は、既存質問で「影響あり」と判定される者の数よりも少数であった。さらに、本研究報告書の別章 [5] において、障害者手帳所持と WG-SS との関係についても分析しており、WG-SS は、一部の障害者を「日常生活における苦労がある」と判定しない特性があることが明らかとなっている。そのため、健康状態や機能低下、苦労の有無等の障害関連指標を用いて生活状況を比較する際に

は、各指標の特徴や差異に留意する必要がある。

さらに、WG-SS を障害者施策の検討に活用するには、施策の対象とする障害者の範囲をいずれにするかの検討が必要となるが、仮に、障害者の範囲を①障害者手帳保持者、②生活のしづらさなどに関する調査の対象、③生活のしづらさ調査より広い範囲を想定したとして、いずれの場合においても WG-SS では実態よりも過小の結果となっている。

そのため、障害者施策の立案に活用するには、カットオフ値等の調整等の対応が必要と考えられ、いずれの方法が適切か引き続き次年度においても調査研究、検討を行い、必要な改善を行った上で施策立案に活用することが適当である。

#### E. 結論

国民生活基礎調査において、WG-SSにおいて「苦勞あり」と回答する人の割合は、既存の質問で「影響あり」と回答する人の割合よりも少ない傾向がある。このことから、障害関連指標を用いて生活状況を比較する際には、各指標の特徴や差異に留意する必要がある。

障害者施策の立案に活用するには、カットオフ値の調整等について引き続き次年度においても調査研究、検討を行うことが適当である。

#### F. 引用文献

1. Washington Group on Disability Statistics. An Introduction to the Washington Group on Disability Statistics Questions Sets. Available online: [https://www.washingtongroup-](https://www.washingtongroup-disability.com/fileadmin/uploads/wg/Document/12a.pdf)

[disability.com/fileadmin/uploads/wg/Document/12a.pdf](https://www.washingtongroup-disability.com/fileadmin/uploads/wg/Document/12a.pdf) (accessed on 3 April 2025).

2. Golden, C.; Summary of Annual Activities Related to Disability Statistics. Nineteenth Meeting of the Washington Group on Disability Statistics. Available online: <https://www.washingtongroup-disability.com/fileadmin/uploads/wg/Documents/12a.pdf> (accessed on 3 April 2025).
3. 厚生労働省. 2022 (令和4) 年 国民生活基礎調査の概況. Available online: <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html> (accessed on 3 April 2025).
4. Saito T, Imahashi K, Yamaki C. The First Use of the Washington Group Short Set in a National Survey of Japan: Characteristics of the New Disability Measure in Comparison to an Existing Disability Measure. *Int J Environ Res Public Health*. 2024;21(12):1643.
5. 障害者手帳の所持状況と国連国際障害者統計ワシントン・グループの指標 (Washington group short set) で定義される「日常生活における苦勞の有無」の差異: 令和4年生活のしづらさなどに関する調査の二次データ分析

#### G. 研究発表

1. 論文発表  
Saito T, Imahashi K, Yamaki C: The First Use of the Washington Group Short S

et in a National Survey of Japan: Characteristics of the New Disability Measure in Comparison to an Existing Disability Measure. *Int J Environ Res Public Health* 2024, 21(12). doi: 10.3390/ijerph21121643.

2. 学会発表  
なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

表 1 WG-SS と既存質問による障害関連項目の有無の判定の該当者数

	WG-SS	既存質問	N (%)
1	苦勞あり	健康問題あり	1,840 (5.71)
2	苦勞あり	健康問題なし	1,613 (5.01)
3	苦勞なし	健康問題あり	2,378 (7.38)
4	苦勞なし	健康問題なし	26,381 (81.9)
合計			32,212 (100)

WG-SS; Washington Group Short Set on Functioning

表 2 WG-SS と既存質問で定義される障害関連項目「あり」該当者数とその比

	WG-SS		既存質問		A:B 比
	苦勞あり (A)		健康問題あり (B)		
	N	(%)	N	(%)	
合計 (n=32,212)	3,453	(10.7)	4,218	(13.1)	0.82
性別					
男性 (n=15,368)	1,498	(9.75)	1,804	(11.7)	0.83
女性 (n=16,844)	1,955	(11.6)	2,414	(14.3)	0.81
年齢					
6-19 歳 (n=4,205)	229	(5.4)	186	(4.4)	1.23
20-39 歳 (n=5,552)	329	(5.9)	342	(6.2)	0.96
40-59 歳 (n=9,310)	577	(6.2)	783	(8.4)	0.74
60-79 歳 (n=10,237)	1,073	(10.5)	1,716	(16.8)	0.63
80 歳以上 (n=2,908)	1,245	(42.8)	1,191	(41.0)	1.05
婚姻状況					
既婚 (n=18,232)	1,767	(9.7)	2,347	(12.9)	0.75
独身 (n=9,895)	668	(6.8)	764	(7.7)	0.87
離別/死別 (n=4,085)	1,018	(24.9)	1,107	(27.1)	0.92
居住地					
人口 15 万人以上 (n=15,370)	1,579	(10.3)	1,966	(12.8)	0.80
人口 15 万人未満 (n=16,842)	1,874	(11.1)	2,252	(13.4)	0.83